

砥石

の
みやし

〈13〉

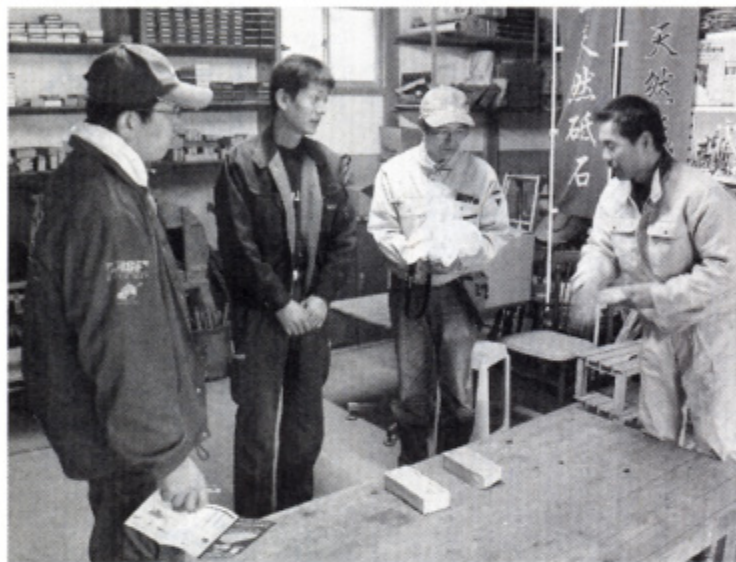
京都天然砥石は「王城五里を離れず」と言われたように、京都市街に近い山々で採取されていた。その良質な鉱脈は、さらに離れた隣の亀岡市までも続いており、現在でも採掘をしている業者がある。その一つである「砥取家」の丸尾山を訪ねた。

「大きすぎて、山から降ろせないほどの砥石が取れるんですね」
金物の産地である兵庫県三木市を中心にした砥ぎの仕事をする船越省三さんから、約三年半ぶりに砥石山訪問のお誘いが来た。今回の砥石山の特長を聞くと、このようなことをいう。それほど大きな砥石とは、どうやって取るのか。砥石そのものよりも、ややヒントがずれたところに好奇心が湧いた。

今回参加したのは、船越さんのほかに三木市のメーカーの宮脇大和さん(三寿マ刀物製作所)と藤原保彦さん(藤原小刀製作所)、三木カヌナイフギルドのメンバー。京都市街から離れた亀岡市の田園を淡々と車で進み、緑に囲まれた集落の一角に、今回の砥石山を案内して下さる「砥取家」はある。作業服に身を包んだ代表の土橋要蔵さんが、自宅兼作業場の広場で迎えてくれた。

「どうぞ、自由に覗いてください」と、作業場に並べてある砥石を取り出す。出てきたものは、天然砥

作業場にある大型の砥石から珍しい色のものなど披露する土橋要蔵さん(右端)。右から船越さん、藤原さん、宮脇さん



石なので大きさはさまざま。砥石には規格があり、決まった大きさにカットされるので、商品となるものはどれも同じようなサイズ。ところが、例えて言うなら百科事典のような、ディッシュの箱のような大きさのものが、ここにはある。さらに驚くことには、土橋さんのご自宅の玄関には、縦も横も約一畳もあるような砥石の原石が看板代わりのように飾ってある。砥石層の最下部にあったもので敷き砥前と呼び、表面に浮き出たアミ状の模様をそれを証明している。これほどの大きさで原石が取れる

典のような、ディッシュの箱のような大きさのものが、ここにはある。

さらに驚くことには、土橋さんのご自宅の玄関には、縦も横も約一畳もあるような砥石の原石が看板代わりのように飾ってある。砥石層の最下部にあったもので敷き砥前と呼び、表面に浮き出たアミ状の模様をそれを証明している。これほどの大きさで原石が取れる

メガ砥石があちこちに

丸尾山①

1メートルもある砥石が看板のように玄関に置いてあった



というのは、めったにないことだという。今までの原石に対する概念が、砥石山のコッパのように崩れたようだった。

ご自宅の部屋には、貴重となった種類の砥石や模様の面白いもの、大きさも厚みもあるものと、手に取りたくなるものが飾ってある。砥石には同社のロゴと砥石の種類がスタンプしてあり、誰でも簡単に砥石の性質を見分けることができる。天然なので一つとして同じものはなく、砥石の色、紅葉と呼ばれる赤み、原石に入っていたスジなど、それぞれに個性があり、それが天然砥石の楽しみでもあるという。

飾ってあったのは砥石だけではなく、床の間にベージュ色の陶器の茶碗。それが入った木箱には「砥取家砥石粉の力を借りた井戸茶碗デス」と揮毫が。刃物を趣味とした陶芸家が、砥石を求めて訪れたところ、面直して出た砥石の

粉を見て、自分が出したかった陶器の色だとひらめき、そのおかげで理想の作品が出来たという。そのおれにと送ってきたものだが、「恐れ多くて使えない」と、土橋さんは大事に飾っている。

このような全く刃物とは違う仕事をしている人も訪れる土橋さんのもとには、刃物職人や料理人、大工など、刃物を生業とする人はナイフファンや会社員、釣り師、弁理士、行政書士など多彩な顔ぶれが集まる。そのような人たちに、天然砥石の素晴らしさと面白さを伝え、ファンも多い。また、地域のイベントでも天然砥石の楽しさを知ってもらおうと、包丁研ぎをするなど、啓蒙にも努めている。

今回のメンバーは刃物を本業とする人ばかりなので、砥石の吟味の仕方がプロの目線。この砥石なら包丁の刃付けに、これなら仕上げに、この砥石の硬さなら研ぎのおろし具合が良いと、手にとって試している。飾られた砥石を見れば、このようなものがあつたのかと、その価値を知っているだけに感激も大きかったようだ。それでも、砥石山の探掘の現場を見学するのは初めてという人がおり、雨が降り出しても雨合羽を着込んで、好奇心に満ちて晴々とした表情をしていた。(佐々木康光記者)



この山の砥石の特長と層の構造を説明する土橋さん(左)

坑道の前の広場には、探掘に使う道具を収納した小屋や、坑道内の照明用のエンジンを備える。その前には、無数の砥石の原石が山積みされており、一つの大きさは分厚い百科事典ほどもある。これ

砥石山の歴史でもある。坑道の前の広場には、探掘に使う道具を収納した小屋や、坑道内の照明用のエンジンを備える。その前には、無数の砥石の原石が山積みされており、一つの大きさは分厚い百科事典ほどもある。これ

現在、主に探掘をしている坑道の前に立つたが、その斜め下にも坑道があり、周辺には以前にも掘ったものもあるが、今では草木に埋もれている。砥石の探掘は、一か所だけを掘り進めて砥石が得られれば良いというのではなく、砥石が得られるうちに新しい砥石の鉱脈を探して新たに掘る。周辺の坑道の跡は、その表れでもあり、砥石山の歴史でもある。

ここからは、全員徒歩による登り。初めは歩きやすかった勾配も次第にきつくなり、所によっては足に踏ん張りを感じながら登る。しかも、この日は雨降りなので、足下もおぼつかない。坑道前広場の手前には丸太の橋があり、足を滑らさないようにと最後の難所でもあった。

集落から農道に入り、しばらくすると砥石山の山道の入り口に至った。ここからは道が狭いので、それぞれが乗ってきた大型バンで入るのは不可能。砥石家代表の土橋さんが、探掘で使用している四駆の軽トラックに全員を乗せて、さらに山道を登った。

砥石の「みやし」

<14>

丸尾山②

坑道から漏れ出た光明

砥石層は厚さ一五層にもなり、主な種類は下の層から敷板、大上(並砥、合さ、砥前、天上敷板(内雲)の五種。これらの種類に色や模様などで、さらに細かい分類となる。どの層からも豊富な種類で上質の砥石が採れるので、鉋ノミ、包丁、ナイフ、刀剣など、あらゆる刃物に合うものが手に入

る。砥石層は厚さ一五層にもなり、主な種類は下の層から敷板、大上(並砥、合さ、砥前、天上敷板(内雲)の五種。これらの種類に色や模様などで、さらに細かい分類となる。どの層からも豊富な種類で上質の砥石が採れるので、鉋ノミ、包丁、ナイフ、刀剣など、あらゆる刃物に合うものが手に入

ほど大きな原石が大量に探掘される砥石層はとうなっているのか、入り口からでは予測がつかない。この坑道の砥石層は本口成りと呼ばれる、層の一つひとつが厚い構造となっている。そのため、砥石として使える層が幅広く、ごくどうと呼ばれる砥石にならない層が少なく、つまり、掘って当たった砥石層のほとんどが砥石になるようなものだ。こうして、大型の原石が探掘され、商品としての砥石も当然ながら大きめのものになる。

土橋さんが傍らにあったエンジンをはけると、隣にいる人の話し声も聞き取りにくいほどの轟音が鳴り響いた。坑道内にある照明の電源になっている。今まで坑道に入る時には、ヘッドライトが大きな懐中電灯を必要とすることが多かったが、ここではその労もな

く中に入るのが便利だ。懐中電灯を照らしながらの坑道は、足もとには灯りが少ない上に不規則な凹凸があるので、つまずきやすい。しかも、懐中電灯で片手が塞がっているために、歩いたり、メモを取ったりする時や、暗闇ではピン

トが合わない力メウで撮影する時などは不便を感じた。明るくなった坑道を見て、今回は快速に見学ができそうだという期待が広がった。「懐中電灯忘れたんですかあ？」というメンバーの呆れ顔など忘れて。(佐々木康光記者)



入り口の広場には大きな砥石の原石が積み重ねられ、ロープウェイも備えてあった。同じ砥石層でも表面に近い部分と中心部では硬度が違い、全く同じ性質の砥石は二つとない。砥石の性格は、明確に違いが現れる境界線で分けられるのではなく、同じ層にグラデーションがかかっているようなものだ。現在、中心部に向かって掘り進んでいるようで、探掘している砥石は次第に硬度が上がっていると

砥石

の みやし

<15>



テーブルのような大きさの砥石の原石が坑道内に転がっていた

エジプトの宮殿の跡か、氷山の中に迷い込んだように、坑道に露出した砥石層は規則的で、巨大ブロックを積み重ねたようだった。本口成りは一つの層が厚いと聞いてはいたが、今までに見たことのない厚さになっている。

坑道の奥に入るとホールのような大きな空間が広がり、その周辺には縦に流れるように層が見える。一つの層は二〇〜四〇センチくらいあり、この層を剥がせばそのまま砥石の原石となる。また、層がブロック状に積み重なり、砥石の種類が色と模様で見分けられるが、層ごとにきっちり種類が分けられるのではない。同じ層、同じひと固まりの原石でも、性格は違う。粒子も硬さも段々と変化するので、色なども見ながら、砥石の種類を

選別する。

砥石層の間に杭を差し込んでいけば小間切れに採取できそうだが、その状況にするまではダイナマイトを使用する。砥石層にダイナマイトを埋め込んで爆破すると、ブロック状の砥石層が露出して作業効率も上がる。「そこに差しします」と、土橋さんが指をさしたところは、砥石層の下の方。層の流れを読んで、追いかけるように掘り進めるが、この場の砥石層は縦に流れているので、下の方へ追いかけることになる。しかし、数年前に京都サミットがあった際には、京都市街から離れたこの山でも使用は自粛させられたということもあった。

また、若き日の土橋さんは、ダイナマイトを仕掛けたら坑道の外に待機するところを、クランク状の坑道の陰で爆風を避けたことがあった。激しい爆発音で耳に衝撃を受け、耳鳴りがするように。今でも残っているというが、「若気の至りです」と笑いながら耳に手を添えた。

枝分かれした坑道に入ると、とうとう見つけた。今回の一番興味を持った「大きすぎて山から降ろ

丸尾山③

坑道で巨大原石を発見



ホールのような空間にはブロック状の厚い砥石層が重なっている

石層の流れを読むが、長年の勘に頼るところもある。文字通り「一寸先は闇」で、必ず砥石層に当たるとは限らない。現在、新たに採りながら掘り進めているという坑道に行くと、天井から草の根が垂れ下がっている。このあたりは石の層でなく、山の表面の土に近い。そこからわずか数メートルの位置に、砥石層が始まっている。この山の表面から砥石層までの距離は、意外に離れていないのだ。

せないほどの砥石」を。坑道の端にゴロリと巨体を転がしている。厚さ約六〇センチ、幅は約八〇センチ。まるでテーブルのような砥石の原石だ。大人二人でも、狭い坑道から出すのは困難そう。下へ降ろすにも、ロープウェーに乗るだろう。

この原石も傍らの層から採取したものだ。もとにあった層には次々と分厚い層が重なっている。この層はきれいな面をしているように、砥石を剥がした面は、コンクリートで固めた壁のように平らになっていた。砥石層が両手を広げた程度では済まないほどの広さに露出しているのだから、どれほどの大きさの原石が取れるのか計り知れない。

この坑道は複雑に入り組んでいるので、現在探掘している坑道から、さらに別の鉱脈を探して坑道を掘り進める。現在の坑道から砥

その層を見ると、先に見たブロック状の砥石層とは違い、細かい波目のように一つの層が薄い。しかも、層の流れ方は水平に近かった。同じ砥石山で、ほんの一〇分ほどしか鉱脈が離れていないにも関わらず、構造がここまで変わっているのに、メンバーからはた不思議がる声がある。

砥石層は水平に構成されているものと思ひ込んでいたし、実際に今まで見た砥石山もそのようなところが多かったが、ここは縦にも横にも層ができていた。一つの坑道でこれほどの違いが出る砥石層を見て、地球が二億五千万年という長い時間をかけて地殻のうねりなどで砥石層を成り立たせたとともに、天然ゆえに人間では想像できない砥石の世界がある。それを実感した。(佐々木康光記者)

砥石

の
みやし

<16>



工房では両手で抱えるほどの大きさの原石が山積みになっている

厚さ一〇センチ以上もある無数の原石が、工房に山積みになされている。探掘されたままの状態の原石は両手で抱えるほどに大きいので、この工房で成形するものもやはり大きい。これを丸鋸で切断するのだが、台に乗せるのも一苦労だ。原石をカットするには、天然砥石に付き物のスジがある部分を取り除くようにする。スジは研ぐ時

に当たると刃が欠けることがあるので、ユーザーからは好まれない。そのため、スジを切り落とすように刃を入れて、大きな原石にもかかわらず、あえて小さな規格にすると、サイズは小さくなっていく。丸鋸には原石をカットするためには目盛が付いているので、寸法を測ることができる。砥石が大きいので、腕の力だけでなく膝でも台を押しこむようにして、砥石に丸鋸を入れていく。この原石を意図した大きさにカットしたら、磨盤で面直しをし、さらに表面を磨く。

市販のダイヤモンド砥石の裏に取っ手付きの吸盤を付け、磨盤では取りきれない細かい傷などを消す。さらに艶を出すために、手のひら大のゴルクを使って磨き上げる。このゴルクは、自動車のブレーキパッドのように硬いが、これにより鏡のように表面が艶やかになった。出来上がった砥石は、ロゴと砥石の名前、砥石の種類を示すスタンプを押し、その品質を保証する。

こうして出来上がった砥石は各方面に販売されるが、現在は約七

ホームページ

HPの掲示板は勉強の場

丸尾山④



原石が大きいので、丸鋸へ向けて体重を乗せるようにする

割をネット販売で出荷している。ユーザーが希望の砥石のタイプをホームページから注文し、それに応じたサンプルを数個送り、その中から選んでもらうという方法だ。全国どこからでも注文できるうえ、試し研ぎもさせてもらえるので、評判は高い。サンプルの返送が気になるが、ネット販売を利用する人はルールを守るので心配はしてないという。

ネット販売で全国に顧客を持つことになったが、購入した砥石で仕上げた刃の写真が送られたり、砥石の種類と性質について詳しく問い合わせきたりと、ホームページは交流の場でもある。土橋さんより詳しいユーザーも書き込むこともあり、「私も勉強の場です」と学ぶことが多いという。砥石を選びに遠くからユーザーが訪問するなど、技術交流の幅は広がっている。

訪問したユーザーは、理想の研ぎを求めて豊満にある砥石を選んで試し研ぎをする。中には、切れ味を蘇らせるのが目的ではなく、ただ無心に刃物を砥石にこすりつける感覚が快感で心休まるからと、研ぎだけを楽しまる人もいる。その気持ちを今集まった本職の面々は実感したようで、珍しい砥石や研ぎ具合を話題にして賑やかだったが、砥石に向かっ

て研ぎ出したら周りは砥石が擦れる音しか聞かえなくなるほど静かになった。しかし、このような砥石も現在では探掘している業者が数少なく、入手も困難だ。この山の砥石に限らず、京都の天然砥石自体が稀少となる時代は間違いなく来る。その時に予想される産地偽装の対策として、蔵にしまっておく良質の砥石という意味の「蔵砥」と書かれたロゴマークのスタンプを押している。これが品質を保証し、いずればプレミアも付くのではと、土橋さんは展望する。

「砥石あつての刃物、刃物あつての砥石。砥石は、京都が世界に誇れるものに」

世界的に認められる京都天然砥石の価値を高めるのはユーザー、守るのは業者。両者の協力があるからこそ、京都天然砥石は受け継がれていく。

(おわり)

(佐々木康光記者)